

タイトル：2024年度 教育セミナー（第20回）

日時：2024年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「2010年代以降の共和人民党(CHP)とクルド人——クルド問題に対するアプローチの変容とクルド系有権者からの支持——」

法島香月（早稲田大学大学院）

当初、私はこの中東・イスラーム教育セミナーに参加する事を非常に悩んでいた。そうした中、参加への後押しとなったのは指導教員やゼミの先輩方の強い勧めであった。特に、昨年度の教育セミナーに参加した先輩方はセミナーでの学びや体験、出会いをいきいきと語り、そうしたエピソードが一番大きなきっかけとなった。

教育セミナー当日、参加者の大半が自大学以外から参加した院生であり、若干の心細さを覚えたものの、そのような不安は次第に消えていった。初日の情報交換会や休憩時間、夕食等に関わった参加者はそれぞれ異なる大学からの参加だったものの、院生特有の共通する悩みや課題を抱えている事が分かり、自分だけではなかったという安心感を得るとともに、初対面でも親しみを感じるようになった。普段の学会や講演会、その後の懇親会では上の世代との交流が中心になってしまうため会話の輪に入りづらく、同世代の院生と交流する事が難しいという強い印象があった。しかし、今回のセミナーでは大学を越えて全国から同じ「中東・イスラーム」を研究する院生が集まり、そうした同世代の人々と交流できた事は特にかげがえのない経験となった。

受講生の研究発表では、普段の大学院のゼミなどでは聞く機会の無かったテーマや分野、地域に関する発表を聞き、一括りに「中東・イスラーム研究」としていても、その多様性や複雑さを改めて実感した。特にゼミ同期を含む修士課程1年の方の研究発表は同学年でもここまで研究が進んでいるという事に驚き、自らの研究の遅れを実感すると同時にとても良い刺激を受けた。

一方、自分の発表では反省点も多く残った。普段のゼミでは同じようなテーマや地域の研究をしている人が多いため、ある程度の前提が共有されているが、今回のように研究分野や地域が異なる人々が集まる場で、初めて発表を聞く人に対してどのように分かりやすく伝えるかという視点が不十分であった。また、発表や質疑応答を通じて研究のフレームワークや先行研究の中での位置付け、考慮すべきアクターや視点の不足といった課題等の様々な指摘をいただき、自身の研究の不十分さ等を改めて認識する機会になった。そして、30人以上という多くの参加者がいる中での研究発表は初めてだったので緊張したものの、これから学会や研究会での研究発表を行う上での予行練習のような、とても貴重な機会であった。

教育セミナーに参加した4日間は濃密な時間であり、多くの方々との関わりを通じて、これからの研究の上でのたくさんの貴重な学びを得た。ここでの一連の経験は、来年以降の修

士論文の執筆や学会発表だけでなく、その先も続いていく自分の研究の中で強く残り続けるだろう。セミナーの4日目が終わった時には、私に参加を強く勧めてくださった先輩方の気持ちが心の底から理解出来るようになっていた。もし来年、後輩にセミナーへの参加を相談された時には、先輩方のように自信を持ってこのセミナーへの参加を勧めたい。